伊地知文庫
文庫20
130

續20
130

# 清氣四卷

全

ゐかし春の須りやよ斎地の龍笛をきゝて
蛙楽をあはひするあゆかむ文役孔雉を備なはさん
とも折小梅をくちあしく告さ霧の名をとれ
氷の色にてさとに安部の鼓吹とも皆かし一つ通し
揚かりくるへる紅の姿谷梅のさき叢のを梅と見分なき
揚かりし紫めきかり淋しの正風うつ世々の昔語と八
まりしかの家のかしくそことゝをなき其葉のかれ
小古きてぬるもいとむさしあまね也此哥見え　春夜
志めやうり折つきも過冥にいたきの行かれとも
散そむ秋のみうき清き句地して緑のおもむろに
松の戸を折知人をたまかねてゆうしかれる

文庫
[illegible]文庫

いつくの人そと思ひ合うのかう
ふる谷のはるかゆしくくゝ遠ふ行あそて
くゝ一めみあぬとゝ　ゝはすくゝ人ふ
ゆくすしられとゝ行ハ悔ゆさんとてあ山て入
ぬ浦ゝ義年を八九年ふ前ゆ
ゆ海ふおとろくくゝさ海ゆれと海ふ船のとゝふ
ゝくくゝ世ふきゝうけふくくゝ元あゝさ海ゝ元あゝ正ふ
立寄て会いさきゝう義あの流ふあふたてあり
松とゝうのあゝや是ゝ実の立あゝて行ゝ会光
少ゝ立ゝ重人のあゝあゝ是ゝとゝあゝら是ゝゝも比所
現実ゝゝ重義を拝すゝあゝれゆくゝさ海義のゝふ

つゝくくすゝを志ゝ行ゝれゝもゝあゝゝゝ事のゝゝれ
ゝゝ事ゝみゝゝ義ゝ拝すゝくくれハ丘陵ハふゝとまゝ海
ゝもすくくゝ山ゝ月ゝかくくゝ百川ハすゝしゝゝのゝとゝ
さゝ世ハ屋ゝて海ゝも義ゝ行ゝ元ゝを学ふいゝくゝふ
くゝ行ゝゝハゝ行ゝくゝ（をいゝ海くゝゝいゝゝゝ人ゝてゝ
立ゝゝゝゝ（ゝゝそゝとゝくゝ長谷の立東の村ゝ常陸のゝ
ふ海行ゝくゝ四ゝくゝゝふゝ元ゝ生ゝて義の
所くあくゝれて八年ゝふゝゝあゝゝ元ゝ村ゝに
ゝゝりくゝゝふゝゝくくゝゝとゝに立ゝくゝ雪ゝ行ゝ海の
時ふ海くゝ風のくゝゝ船ゝ海ゝゝれゝくくゝ社くゝゝあゝ
ゝくくゝ東海ゝ度ゝ命ゝふゝゝゝくくゝ海ゝ

くこしそとつ世なつ
おとろうれぬるとゝ源氏
かるこひしんとちう
腐らやさしくんふく
いつゝ京の奥ちう
さしのいとちう
なゝなゝ中納言
そゝ人つゝ
以かる腐
おとろ腐
ち海しなゝ

ちひの後も今更り
ぬゝと源氏ゝぬゝ中人ふ
けうりわけれゝ事の後乃
道しうは山ち海ち
見ち道ちうん
ち行ゝちうち行や
たゝけかゝうんの
かゝうとゝさん
ふ行れた東の
腐に投ち
ち寄えと立枝ふすうて

らんのとゝふふてかゝ（をたれゝかそれるを
まゝと世ふ人ゝゝそゝ見そゝうはの元ふゝう
腐るもさ海ちうゝゝれ大別のるふる
腐ゝ腐ちゝむゝ腐のきゝ行ゝ行ゝ古き日記
なゝふふるかゝつゝ腐ゝ手紙の人見ゝ人ゝの
まゝに西安腐ゝ人の命八百と世三百十五日とうや形
世ゝ腐れた腐腐八十宇ふ及人ゝふ稱ふ腐行はる
き苦腐紙中一き文ゝふすゝ腐ゝ義の義を
ふるふゝ八さゝゝ力平ふ京あまう腐ゝらん雪き
見と見ぬゝし事とありのまゝ少腐ゝぬゝと云

（ハニ又うこと上有）

一八三事に行う義う年ふ及ふ人も今八京ふのう

小ものゝ作り後鳥羽院の東院にてこの道のすぐれ
たるのゆへにて召しかゝへられ給ひ[illegible]いつくしみ
もてなさるゝ小もの[illegible]千事と世間
つゝみてもらしきこゆまじきよしなんと云いとゝのへきこゆ
く京にハさたしてこれもらのかゝるなんとしへハ
とハ太子なりもゆゑんハ世間のさゝやき世間の
法時よりかゝる作り也世ハは苦しう名地なて
作りしらともてさしたる
後白河院二条殿の御とき
[illegible]兼元二年の比ほとよ
[illegible]ときんうきつくり也
[illegible]世間にて作りもの法師成の
法時ハ世間度ものゝ[illegible]唐申の日ハ

此作りしゝ弁内侍なと立めの房世間
師世間の間より紅のもう面衣をつまらせ
おりてうりみらそんもをもぬ句ともや
おされ作りしは人々感ゆ[illegible]ゆ涙
世ゝ又世間の尼と七八十ゆ世間しも
作りきそれハ京極中納言入道なるし時の人
ゆゝ作りもれハ女の世尊師なの作ぬ
[illegible]なるなりなと純ゆ世間作ゆ
年ゆ問しなれハ作りしゝのをうて
さらのゆゝ世間ゆゝ作ひらと
とハ法師のゆ作ハ作りのとの世間

武弓ふいとりの歌をもつて甲斐国打の宮より出
こゝのしまのひとあるもつまこ行ゆかねと流るふいな
くゆしくなて歌八雲歌とこゝろ行ふん
仏道のゆ者ものをもなのふらんかゝを拾さに
ゝう行をこゝ八すべて此道の名をもて仏道八
あとゝ行のゝしくゆ者ものもなりしうもゝくの
道のゝるに法華経ゆ行ゆゝ支連歌のゆ八まゝ
いとけかゝうし行ゝるゝ京都の中納言民部卿入道
ゝるゝにるの物あゝ物ゝゝ物ひしゝはゝゝ
行時らるゆ中或地下のゝくゝ八まゝ物道世くふ
ゝたゝたゝ行ゝゝ法華ゝ経のゝゝふ

ゆ名ゝ八をのゝゝ世ゝ言ゝ八行ゝ八ゝをきし
ゆもゝのまゝにゆ一きゝゝゝゝふつきてん世
こゝのゆを行ゝ同言行ゝゝゝゝゝ行ゝ
方にゝゝゝゝあゝのゝゝも打ゝきゝは言れゝ
くゝゝる或情抵の妻ふゝ世貧行ゝんゝゝのゝん
人八ゝらんゝゝもゝゝゝのゝゝ八まん者ふは黙をあひ
行ゝゝゝゝなり

一同云歌八仏法華経ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又他のゝふも行ゝゝゆ者ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝも行ゝゝゝゝゝゝは天竺すべて八偏ゝゝ行の行を
流ゝゝ八別ゝ歌ゝ唐ゝゝゝゝゝゝゝゝ

まてハ哥をつゝけ候ハ連歌とかにや昔の
人ハつゝけ哥とぞ申侍りし

一問云連歌ハ以何の代よりはじまりけるや侍らハ
まうさせ給へとこまかに承侍へし答云古今假名序
に貫之の書るあまのうき橋の下にてめかみをかみ
云詞連哥之

一其おこりの発句に
あなうれしゑやうましをとめにあひぬと云ふ
め神の付くのつゝきに
あなうれしゑやうましをとこにあひぬと付給ひし之
・是を人しらす此連哥とは申也二はしらの神

の発句紙にあなにや此句は一字にもあまりみし
かゝ侍らはうてひとつ給ひ連哥と名付給ひ
古の明匠集にも録申侍しかハいまたあらんとて
侍らましく文連哥とて云ときハさゝきに申
侍る紙に日本紀に景行天皇の御代日本武尊東のえひ
すゝめのにむかひ其ときに給ふ付給へるつはを
ろしく甲斐国酒折の宮にとゝまり給ひし時日本
武尊のたまはく珥比麼利莬玖波塢須擬底異玖用加
祢菟流すと付申人なかりしに火ともしはいけ
なきらうハの付て曰伽餓奈倍底用珥波虚々能
用比珥波苔鴉と申侍りきこれハ哥のはしめなる

とかんたを後百万遍に紙に入らる故称名のさかい川の
あら我せき入てう一見とも云に尼のかゝるさい
申すはとらぬ庵しと成侍らるのるとも
後世にとゝめらて捨置令蹴なとらう勅撰に
入侍へされとも猶て一句て云捨てしらうにく
五千句百句なしとふをいふるやへ文殊なりふ
後鳥羽院建保比にも自筆文字との今物の記より
連歌我宗家経にたとにめされ侍しより
百韻なとにも侍めや文さまくの異相なとされて
在ひとしき会ともありきとしきもて歌と云
侍る也の歌と兎角連りしきは栗本の歌として

別に柿本と侍りし無心衆としてほし
き連歌と粒句とも申すにや連歌としつまとと
常に侍り土御門院順徳院なとの御製に詳に
給なりて後にも侍し後鳥羽院財文且りあらく
民部卿入道為氏大納言為世卿ていに志不ありとも
ふりくし承侍し京極中納言入道と定家に
は同しくに連歌をもくまて侍るの一両服とらの尼と
今や云物まてにくし常に緩り出らりし資記なとも
こまかに記ともまて侍り非も家出られし侍らん
後鳥羽院の御時ハ福光園関白良基公御年摂政太閤中
の御連歌なとも殊にさまくへハ世に残されても名誉

の世をふるまひ作法をもつて無所詮なる
わざをなすことあるべきなり
本朝内大臣基家公笠内府家良公家隆卿等
を時雨殿とうたへり作
とりの好士なりしかども地下にも能の
ものなるべしはかりてぬきかねてるときこそ
作法道を第無学なるべしの法はつを
法師の見のかぎりあつめて春
こそ花をもつて作り夏こそ作り
地下の好士とかりぬ作り
夏の月をもつて松のしたくの武者
とつくりなるとして

世間にちきりなれハ学て
ものしりとなるべ世なれぬれハ文盲の者
ハ作法第なるべしとなるべ作者文段芸術
照覧ハ毎ハ第なるべ数句なるべ
学ものもなくの作者対ハ数学ハて軽撰
ハ乃ハ作法ちく学問慧対ハ数学ハて軽撰
の物者ともありて芸なくなるべ
なるべて第なるべ道の法なるべ作ハて
作者の第ハ作法なるべ
ひく風のうつりうれはあるべ物ハ作
放逸と芸の学なるべ歌なるべ

はしたなくあらぬ趣こそ作りあやまりとて、御弁なり
まことにありがたく覚えし事なり。近世は
末の代にもいひかなへり作りんすんをそらつき、
後世こしかたの作りにや、紀貫之は此の姿ハ古
よくある撰ばれ勅撰のえらびこれしものよ
姿を知りとられて連歌の人ハ今の代あふべき
しやたの連歌ハ長句とたゞ一句を云つけぬる
まなり中頃ハ文句のならひとさる句と云の作ふ
云てまことに定ならそんかうて詞をこゝろえ
面影の具を浪すやうめるハ花いまして作りし
さりきに疎く四吝懐紙なりとてともひ侍るそ

其の命も粉のひぬつきんちしても作る大事也此
道ハなきて民の耳にちかくてしかも風とも
うけし作り人弟子も得と云文に教の作やと
物ふ云も詞の花にや文句文に浮廣するにて
されハ浄句すしいふことは心の内にと申侍るや
句の姿ハ能見り分別とありんまた句ハひとよう
古のことハさてまれなるかけまぬハ面影の感の
ゆうなる思ひん具ハある人見よ見に云てわつかに
こゝろ得をかりて[illegible]半[illegible]頓阿の
二位入道の句のうちとやさされるにも詠句
とて打ならむれハなるやらん面影をひとへると

こそあれ〳〵月やあらぬ春や昔のなと
云ふ哥ハ詞ときハさる用ありかりけるはん家に
しむんちそする春の色の匂ひより露のなを
ひき梅林の梅よ鶯のなくねしらう菜よ
風情のそひさるをは哥よりもあらはれさるた
春哥の名と又うくさそ作りめかすへてもすき
のへハえ逍遙の境りくはもかくも志めへきなり
晩唐の作と云ねとられハすへてもあるもあらぬさき
より時のおもしろくて色のもあらはりしり
なまへ作らく作哥の名ハ多んたしかにて詞の色の
はりをもゐ中にまくとこうへき松ふとれハまく作り

一 問云春哥ハ本のまへりてそのたすけなくとも作ゑきや
中人作りハ作りけるのるなりや答云近てもなりへくて
後世鳥羽ハ大方歌といへりハ政のなるかまてとも侮つさ
しくハ中古の悪作れハ松ふに本を哥を飛ひ
落しもなくしてる本法に花をけらんしそ
本の政をあやまれしくたの哥ハ長韻に云み皆
は哥なり松にして中人ハ飛ゆくて本の政ハゑ強く
なりそて作りや作の義を云ふも章注とそあらしみき
百家ハなりたく月花にかしては歌ハおれ詠作り
されハ古今の序にも三吉実居落くしてときみなる
さうなるも云ハ堂く又すまのあるなるをとれく作

すもの、なかの中ゝとゝのれども皆、前のやうに
きこえれゆゝさ海をい（うその前ハ海を老とをして
極楽をめでゝるもうらうて風雅のすゝめ
なきうるゝ事ハまして世ゝうひ作り
ゆしきあさいふ面白きにてもあれ作者肖
うるきいてゝつゝあこ一字のてゝをとひつるを
いまた西理にあてゝ無すうを主意のうるとこ
をつゝんでゝさうあるものの句ゝ
あ見あ主ハをゝうの主意の七八句も皆称作
されを佛法を世法と道理を云ハ又まうて作
うし蕉法和尚ハ作人をうきとうをあの

洞水河水

洞水河水
ゝたゝ洞するとをならんする八海をさま
ゝるこゝろもけゝ風雅の主意をそ作りきこ
の見縁ゝ（ゝ）ゝ作ハ世人句作者提
蕉云大方ゝ作者の作佛と事成唱作ハすと云
ゝ句ゝ作ゝ神仏の霊験も奇ふてゝ
験験尊き作ハ今文中に及ぶ主意ハ詩
あゝん人ゝ入ゝゝ作ゝされゝとゝ
佛法禅師蕉主師ゝ意ゝ作ゝ
作ゝゝゝあらん得と作ゝん
情をあん作ゝふ主意ハ蕉念作念をつゝ作者裏

憂執さらに残なく／＼すてゝけり さて成うき世の
ならひにてみなかの此身よし出家ハおのつから遠ざかると出家ハ
秋に紅葉と出家ハ和哥にうとくして花見かな
詠の無念もなりけんや宮の作ハ芳人能ハ執心し
御しく詠に試さ一首に命をも和哥をおもひて己死
しらたのしも御らきし其哥ハさやうの事ハ御なき
事なたし当世の撰集にと侭ませて知れハさのミ
執着執心なきる事之一度もさしひ大事念なけれハ
悪念もなきのつらきさらに御らへきる事あし能に入ら
なかりし強御からし為かんのうちに於とかすを
今のまうに中とハ定て此との難と被申候

一 御しん
一問云初心の時ハいまに稽古しつ其哥ハ好み御給
つきや 答云人の性さまになる也古へよりは中々今
愚子云文にハ生つきの心ハよきと揚かれなりき
ことにかれぬるもハいふなきも云ひ第一と云
文にも生得の性にてきと揚かれ学問として
とくなきも以ひ揚かれ云文ミにハ人の性ハあまり
善悪御しらぬ揚かれハなきうてにひかれハうく
なあしきうたにひかるまハあしくなからも
此とのいつもれらなきいもれなや其哥もよまれ
付まりに天性をなるらめとあるへし文生得

のいとつゝ趣もさうそ古人のよみかたと無のこ
うつしすとていふにすれともより八能ゆかく
無りあしく分を行さ清しかうる之文君
悪のましやうの性発句に続(きやうに)しき
言のものくぶそみにかく比定句くねる之八雲御抄
にも前の作と大雲文珠の智恵よりおこりたと
うしも猶うりや宗祇ゟ付とらまれたる前八
十六七の比弥せられしかにも名前とも無き之
天の元おもえハかゝる無となしなくしよりの
ハ三以物の前とうけ猶行ましき前と芭蕉の人は
初学より面白く文[illegible]としてなりゆきましく

されともうなりしき発句ハ社句海八ものいの
(けまと)初心の人多くハまた前のつまり作るゝ也よく
初学ははうきくと句をや山めとこゝとなりき
やうなりゆと覚へいしく上手にすゝしりて達者に
絹とみえき風情とも少しなし作り[illegible]云なる物より
まあき面白かれて葉しく句のつまりさちぬき
ハ達者に絹も世むもうやくすくあるらの
なきこ多く芸より上手と云人の発句の成と組
しらハ胸中に句多く所きて発文と句子く
しゆるとのこゝ[illegible]しこされハそそ平ましぬ
又発句あつしんにハ子めしかハのあり作くなりて

そもやきうらくしろうみちきてしそ
うかりしき良哉に心ぬ人なれ昔難波の三位入道
人に翁と芸人給しと筆にそへはありいかにも
ひろちなかうちよまきと芸のこと徒を次日又何となぬ
人にあひて翁のものかたりしいかにもすかりたるか
うれしき給きもまき老ハその人のまきに對しと芸人ハらま
給ふや後すに昆弥にハ平生の給かきこその人ハ
をかすいてうしろ後にひろけなるかたきてあると
芸人後の人ハそひろこそふれハすいてきるかまそ
あるとかし之佛の二字の氣にかいして一方の法を
説あ人かと皆かくのことしまで大と皆にとうと

なしん人ハ楽しふかうきたかにて老のみ
ふしんかは楽をぬりすきてとして人きこえ給ふ
とれハ学くてとこともなまき中によきの場所を
つうし好女きこえ老つとそそしん人ハうらに
きよきなるめかりしきまやたよきにむめら
そひん絹をまひ給ふ一かよきにそひて行るき
小枕花しぬきもハす人くなそかしきてる福々の給
好ミ万葉以下のふるきことのみ給ふ人かにい
あさくとまつりのやれくまうそ絹やはしく
白うふ志はふさき行しる面白かくれと楽かふ
るすぬ好くあり人うすめ伊に流花ひのふもうきハ

きまりきやと又うるとたさのこうるきう
のこうてハ行ゝ三位ハ師匠のもうしゆ（きうと）
もうしの位のうと雖とうゝふいうもてて
こうてあうるまりあれ多多とうしとうひてすと
あやまりのかうるゝきまうやゝ人のかうひ第我の
ハうとうひ人の自慢とうとうもうこうもいふしうう
うかふうん人も甚のゆゆきゝ孫ハ角ふかゝ中
ゝ多まて行うるゝ人ゝうきゝ又ふ
あいゝ孫のうまうきうまりて行ゝ古社の
又通ゝうゝかうれしう

一同云五番ハいうとうに古ハうゝやゝ又

ちゝ風情ものはうる事ゝうきゝ番云五番
逸の新ハさゝまれうるゝ多れいうもうりき
姿とうて寸うれうも時のぬ恵ふ行ゝちうう
るもうゝきやゝるのはめの三百番歌ゝ成ちう
れうちゝ行ゝきうゝ角ゝの百歌いう行ゝうき
ゝとうのうゝ百ゝうふゝ多ゝふ多ゝ
歌百ううたゝうゝうきゝ多ゝ百ゝの海とし
きゝとうゝゝ行うるゝ又但の五番ゝも一の懐紙の
百のうゝハ志ゝやうふ五番ゝとゝすゝしてふハ歌うき
うるゝゝうゝうるゝハをぬ事ゝ又二懐紙うう
さめき角とうて三位の懐紙とうに逸無うゝ

ふし作らるゝ樂もあり破急のきよく色目のも
一今様八帖二今様破二の懐紙を書て
まうもあり小作りとて手道の名人ゆさて
書所の面小色不めりしき詞又をふみき是あうれ
ゝるをなりてふと始ゝ作りゝ色の
作ゝ

一問云ゝの色葉白ゝに面の作ゝきやうん又地
書所ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ
面のゝるも所ふゝて一所の志ゝ所ハ所ふ
ゝゝ所まも作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ
のん作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ作ゝ

ふゝゝゝに面逆ゝ三句ゝ作ゝんゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝふゝゝ作ゝき百首のゝふ地所ゝ面逆ゝハ
所ふまゝ（きゝゝゝ古人もゝ作ゝ作ゝ作ゝ
ゝゝゝゝ程の人ハ地色所ゝ敬婚のゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の焼ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝも題者八人作ゝきゝゝゝ色のゝふゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

みかと御しろし召代より およそ物のみかとには
あしく次文字詞にて あそひしき悪きの代にも
も能々ありけるに行に苦ふしふにつきて慣まれ
悪ことも申御しもや人々もりたるおかしうん
小ハおく行きるなと申すへきやまゝ云の一
道ならうならず御まうしきや
一 問云発句ハいかやう小すへき物にや答云前句の言葉
のこしたる発句にて候之発句ハ何ら弟れも一躰
皆けうるされハ指能容をにゆんかりて前句ハ
斟酌をつかまつり今発句皆げに新をのかれす新せ
文侍りし道て道の至極として候之いかゝ世に志るす

應りすに発句の上ことにハ深きんのこともに
ともいふやさしくきこゆうへしき當代の後に
叶ひらぬと京とハ中かりし一毛のかみふんハある
しく此まま遠をてハ主人むすへ発句皆大事
に御前指相心霊新しき露とハ南ナ春の月と云
二条ノ后光明照院寛申度の九日ふ浅と毛竹し
庭の雪かくまさ此ねふるかくしも芳の主題とハ
中むれそハ小かりのみの中かとも人すにき古の中候
り也 徳大相公の文雪まえて目新ふおりて旅寫く
せらせけりし寛殿の内裏の七夕の雲のうへにふ
りふやて世や天の川みてせさを結ふる

のみあすかくまとも思ひて仕立へ作しより
いかぬ場所と当座の百韻なとにハことにあさしく
用ひ難き事にする一の作なくあるも句を
ふつせんとするにハいかにもおもきかねものにハ哉
おもく句に発句此事ハ句をつくるへしともある
事なりし作者にとさし発句ハたゞ殊ある事に
一句しと案し入ずなるへし是迄もむ杯にある
しかうく当しかなへし句の事つき当座の
発句の姿解差別あるへき也とそ道定め
し
一 問云脇の句ハいか様にすへきるやと思ふ 答云脇句ハ

発句にうけてするなり発句ハさのミいはぬさる
事なきにあらすしてもまたあかまうに年懐
なかんとうる也そもそもすなるうくつ詞をそしくん
けうんさとしなく一いへきこともてはしき様なる
脇の句ハ必とけうなきへき事也 発句ハ百韻なとの主客
為ある事とそ主客の也とけて亭主と必すると
又人作りてもそれハ主客の心をとけてあると
誹やうにするも挨拶とさやうなるも作人後
発句の花おしやうなとかれて作之別のまくと
ぬ事ハまへきもとそ古人の中に作挨拶
名句ハいろくなるものあれハ相抑ゝてしる作る

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

書院に入候ては毛氏の社前
のことをふくとはれる異あり書を作へられ書
其名獻の名なりも書作るやうなる前小野
はるこをうかがはるる我出の古りの名を稽
古なりて八幡宮のうたまつりあるりのりやと
おもはれる和漢連句をとりさかりのうるき物の
ふなりに異あるへきしの物なり書和漢連句をハ
ふんとりて詞とまはるべきハ中作歌ふ
作句をとりやとの作し給ふ
おすへふんとうき歌と歌ふのうらう
ふれとりて作るきうりに



作歌ふ和歌を作るに歌の問ふ作ハ
文ハ地連句のそうもぬ地連句ふ国ふ
入ぬれハ歌を宮へきこハかやうの作うう警ハ
次第ふうなりもきさうや

一問云勧ふる上八人うう人数を定て作る連ふ八人
のあ作ふ作へ若衆も作へきうう作へ
てうきへき若云ふ作ふ連ふ志賀の能書
七八人うそうきうう一座の作
人と無きへきあれあもう人数ふなる
うう句つきうう文ふ作へ作れうる
高うふ作ふ作へ一座の作ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

入道のまち淀川の水の[illegible]

[illegible]

[illegible]

一同五月歌、鶯石の行の行雲の[illegible]行の[illegible]漢

の古の行[illegible]

事と鶯石[illegible]行[illegible]

もやうて月小[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 関白殿の御元服の時、松殿御まうけ[illegible]
風俗いとゆゑ[illegible]
たてまつるに、[illegible]
十八ばかりにて、[illegible]
殿の御前、[illegible]
[illegible]

一 上古様

やまとたけのみこと

日本紀
小いなかの[illegible]
小いなかの[illegible]
[illegible]
顯宗云ふいとうとはちまつ[illegible]
きこ 窠 宍[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

さが川のみなもきよく[illegible]

あるつもり[illegible]

かるいさいかをひろう[illegible]

一中古歌

[illegible]

さ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

桃[illegible]

[illegible]

梅津の梅をもちやしろん

[illegible]

四北中ふすま入ぬ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一条兼香

乙女はかりらをとり集めて

法二位家隆

つまもいまさら宿のしらゆき

きく作の大文人のうちに

前摂中納言定家

一枝をいかぬ花のうつろひ

谷地小川のあまりしらし

前大納言為家

ふるさと春の花ハ消

たちそふる霞の神ぞ残りけ

山将内侍

この春ハうちはれ春乃明かの

春はふるとうつるとうつろ

前大納言為氏

あまてとうしてあるかの櫻

ちるのかるるをさうん

奔内侍

ゆく春の雲の比と月にかれ

小萩ハいつ数ふ雲ハ紅葉

法二位家隆

庭のうハ毛のかもあうん

寛治元年八月十五夜内裏にて人々
歌よみけるに
中将内侍
たちまちすれる枝のうへの風
前大納言為家
ながめこそ秋の月
寛元元年二月法華経百首のうち
いつるはなをいとはるる
梅の花
寛治元年二月歌合百首のうち
ながめこそ秋の月

世を法師
をうらやましくうらやましかりし
日ごろ二月歌合百首のうち
ながめやすらむ
道生法師
うらやましく柳の枝のみどりに
ながめきぬ
基家前宮内卿
山賤の柳のうへにみどりなる
元亨二年月歌百首歌合の
ながめこそ井の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

幽玄體　風情句　眺望句　本歌句　古事句

心付句　詞付句　對物句　哥會句　てふもの脇

季替句脇　飛落　鬼語　粗句　初字句

一問云主歌の式目ハいつもの法ならぬ事なれ共中古よりて八一二句を法式に成ぬ有んかなしてあるべしと句ちがふ式目を沢山に成ぬ自新式目ハ二句を法式に成ぬ有相の長句の式目なしと云

おさまれる當時用たる新式ハ大綱を基なれ共法式に成ぬ有ん地下のともしらぬ面々ハ式目を知ぬ者ハ式目をしらぬ者ハ式目を知ぬ者ハ式目を指して無作法なりと云ハ是を知ぬ者ハ式目を知ぬ者ハ式目を知ぬ者ハ式目

[illegible]

一同云主殿に百貫の[illegible]
[illegible]百貫[illegible]
[illegible]百貫[illegible]
[illegible]

[illegible]百貫中納之入道殿と[illegible]
[illegible]百貫[illegible]
[illegible]
[illegible]

一同云主殿の[illegible]古実[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

時安永四乙未歟中夏再寫之

長岡園藏書